

東亞人文學報 第一卷 第一輯

京都帝國大學人文科學研究所編

依つて、いみじくも築き上げられた惟神道こそは、佛教育成の胎盤に外ならぬとし、佛敎の流傳に依つて、惟神道は聊かも變化を齎らざなかつたとするのである。而して氏はこの新しき主張を裏書きせんがために、従來の史家に依つて既に取り上げられた奈良時代の金光明經信受の盛行の事實を再檢討し、王法正論を説く同經が、正しく受容せられたのは、印度・支那・日本の三國を通じて日本以外にはないことを確め、更に溯つて佛敎に於ける王法正論の思想發生の淵源を尋ねて、轉輪聖王傳説の源までに溯り、それが印度の先住民族たるドラヅガ族の包摂する理想、惹いては西はエデプト・スメールから、東は朝鮮、臺灣にまで擴まり、我が惟神道にも深い關係を持つと見られる日御子傳説と至深の關係を有することを強調する。

かくして我が國に於ける神佛二道の融合は、極めて深い根柢を持つとせられるのである。

氏の所論は以上の如く、アジア全般の宗教の本質に關聯する非常に雄大な構想を持つてゐるが、一面多數の史料を引用して、一々その所論を確證してをられるのは敬服に堪へない。氏の提唱せられた佛敎受容の胎盤に就ては、今後更に究明を要するものがあると思はれるが、今日我が國の最大使命が東亞に於ける新秩序の建設に在る時、かゝる内容を持つ論説が現はれたことに、大なる意義を認めずにはをられない。今後の著者の精進を深く期待する次第である。(菊版三四八頁、東京日黒書店發行)〔赤松俊秀〕

世界史未曾有の轉換期に當り、東亞新秩序建設の大任を背負ふ日本にとつて、「新東亞の建設に資すべき人文科學の綜合研究」は、まことに緊要なる課題である。

斯かる目的に副ふべく、一昨年八月京都帝國大學内に創建せられた人文科學研究所の成果如何は、人々の齊しく期待せるところであつた。此の時に當り、今回その第一回の報告として本學報の刊行せられたことは、實に意義のあることであり、慶びに耐へぬ次第である。

此の書を繙かれた人は、先づそこに溢るゝ熱烈なる興亞の意氣を感ずることであらう。「本學報の旨とする所は、東亞の現狀を明かにし、且之に本づく原理及び政策を考究するに在り」と巻頭に叫ぶ小島所長の發刊の辭に現れる精神は、そのまゝ、十四氏の論説、又書評を一貫してゐる。國家學に、社會學に、歴史學に、地理學に、或ひは法律學に、經濟學に、あらゆる人文科學の綜合研究が、一つの理念に副ふて心ゆくまで展開されて來る。そこに見られるのは正しき東亞の姿であり、又輝しき未來の東亞を豫見せしむるが如くである。

現下に於ける、皮相の觀察に墮せる、汗牛充棟も置ならざる東亞に關する出版物を讀破されるよりは、讀者よろしく先づ權威あ

る本書を繙かれんことを。

最後に、今後單に日滿支に限らず、タイ・佛印等を含む東亞其
樂園の研究調査を期待して、此の拙劣なる紹介の筆を擱く。(大判
三二四頁・昭和十六年(年四回發行)弘文堂書房發行、三四五〇錢
〔中田榮一〕)

忽必烈汗

愛宕松男 著

今事變始まつて世人が蒙古に關心を持つやうになつた狀勢に
「便乘して」幾多の蒙古關係の書籍が世に送られて居る。その中で
最も注目すべき現象は成吉思汗に關する翻譯・紹介・研究の多い
ことである。成吉思汗が蒙古帝國最大の英傑である事は今更云ふ
までもない。この人物に關する研究は當然行はれて然るべきであ
る。しかし我々が一旦よく詳細にそれらの研究を検討すると、中
には暗に政治的意圖を持つた宣傳の書であつたり、破壊者とし
ての汗の一面を強調したりし、その材料の限られて居る事情等も
手傳つて、甚だ不満を感じしめるものが少くない。結局そこには
成吉思汗が、英雄であり軍人である事よりして偶像化されると云
ふ事に終つて居るのである。我が國人の間にも歐人の研究に優る
とも劣らぬ研究をなさんとして居る人も少くない。しかし蒙古帝
國に於てその具體性に於て、その建設性に於て遙かに成吉思汗を
越し、いはゞ當時の蒙古人として最高の政治的能力を示したと考

へられる忽必烈汗に注意を拂はないのは如何なる理由によるもの
であらうか。成程彼はその祖父ほど他國を滅しもしなかつたし、
國土を膨大にもしなかつた。その點甚だニユース・バリユーはな
い。しかし忽必烈汗は破壊者としてよりは寧ろ建設者として、英
傑としてよりは經世家としてその東方帝國に於ける帝王としての
地位は絶對である。著者が未だ全然傳記として成立して居ない此
の大汗に關して一書を世に送られた事は實に此の點よりして重要
な意味を持つて來るのである。

忽必烈汗と其の時代とは蒙古帝國史上一大轉換期として人皆そ
の意義を認めざるはない。即ち成吉思汗によつて一應肯定された
ものは此の時代に至つて否定の傾向へと走つて居るのである。成
吉思汗の遺産は拖雷家の蒙哥汗の出現により急速にしかもかなり
不自然に中央集權を強化して居る。社會的現實を基礎とした制度
として組織されるには今少しく時間が必要なる所であつた。蒙哥汗
の急死はいはゞこの大帝國にとつて一種の危機として現れて來て
居る。例へば大汗の位の繼承法の未確立、軍政民政の不分離、巨
大な封建諸勢力の殘存其等は大汗の側の記録として殘されて居る
我々が普通使用する史料には大きなものとして記されては居な
いが、生きた社會全體として我々がそれを理解せんとする場合に
は其等の諸問題は輕々に判斷出來ないものを持つて居る。現存史
料の小さい相似形を以てしては單純に片付けられないものがある。
和林には阿里不哥、トルキスタンには窩闊台の孫海都と察合
台の孫アルグ、欽察には朮赤の子ベルケ、イランには旭烈兀が居